

JGR
LEVEL D

「おまじなさん、ぼくの魔女」

まじな



とよつなほくの魔女
まじよ

登場人物：
とうじょうじんぶつ

野崎竜彦・会社員
のさきたつひこ かいしゃいん

32歳
さい

野崎保子・竜彦の母
のさきやすこ たつひこのはは

58歳
さい

萱島ゆう子・7歳・魔女？
かやしま ゆうこ さい まじよ

萱島千絵・ゆう子の母
かやしま ちえ こはは

萱島登美子・千絵の母、ゆう子の祖母
かやしま とみこ ちえ はは こそぼろ

60歳
さい

萱嶋将之介・千絵の父、ゆう子の祖父
かやしま 将之介 ちえ のちち ゆうこのそふ

絵
え

ハシ・レヨン

書き換え
かきかえ

宮崎 妙子
みやざき たえこ

原作
げんさく

久米 粹
くめ じゆん

萱島源之丞・千絵の弟、ゆう子のおじ

キヤサリン・萱島源之丞の妻、26歳

部長・萱彦の会社の人

藤沢ゆかり・萱彦が結婚したい人

場所・日本(北海道・九州・成田空港)

アメリカ(オレゴン)

(1)

男の人と女の子は親子だろうか？

女の子のお母さんはどこにいるのだろうか？

北海道の5月。日曜日の夕方。夕方の赤い空の下を車が走っている。赤い車も

黒い車も白い車も走っている。

白い車を運転しているのは野崎萱彦、32歳。青いTシャツにジーンズをはいている。

萱彦の隣には、萱島ゆう子が座っている。ゆう子は、目が大きく、色の白いかわいひ7歳

の女の子だ。

「ねえ、おじさん」とゆう子は運転している萱彦に話し掛ける。「私のお母さんと結婚し

たい？」

「うん。」

「ゆうぢやんのお母さんが好きだから」

「そう・・・じゃ、私は邪魔ね」

「邪魔？邪魔じゃないよ。ゆうぢやんのようなかわい子供がほくの子供になってくれたら

うれしいな。どうして邪魔だと思っの？」

ゆうぢは童彦の質問に答えない。

「おじさん、おじさんはお金持ち？」

「いや、金持ちじゃない。でも、一生懸命働いてゆうぢやんとお母さんを幸せにするよ。」

「お母さんも私も今幸せよ。おじさんはお金持ちじゃない。じゃ、お母さんは考え

なければいけない。」

「なにを考えるんだ？」

「おじさんはお金持ちじゃない・・・から、お

金がほしい。だから、お母さんと私は保険

をかける。そして、保険のお金をもらったために

私とお母さんを殺すかもしれないでしょ？」

童彦は驚いてかわいい顔のゆうぢを見だ。

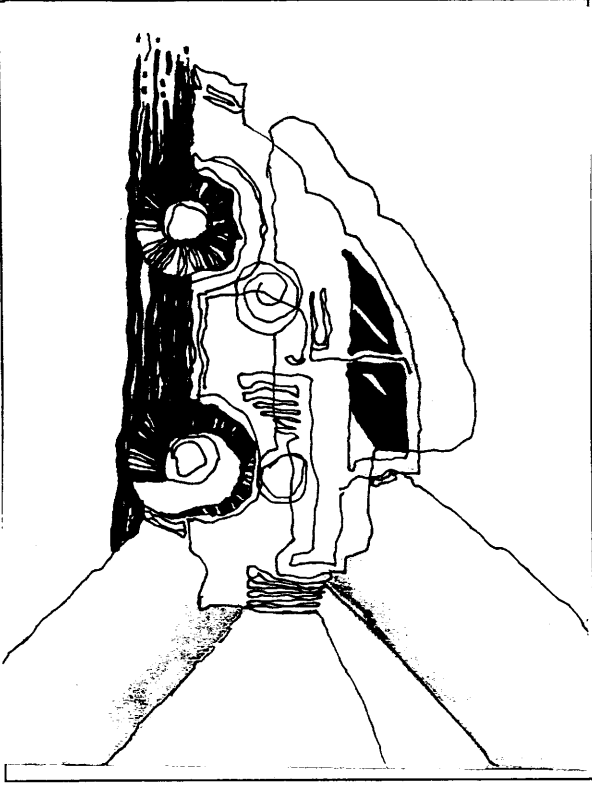
「おじさん！前を見て運転して！あぶない！」

童彦は前を見て、言った。

「君は、おじさんがそんなことをすると思っ

いるの？おじさんは保険の金がほしいから、保

険金のためにお母さんと結婚する。結婚し



「お母さんとゆう子ちゃんに保険をかける。二人を殺す。保険金をもらうために。」

「そんな人がいたでしょう。テレビのニュースで見たよ。」

「ああ、ひどい人がいたね。でも、君は、おじさんとその人が同じだと思ってるの？」

ゆう子は答えない。何か考えているようだ。

「おじさん」とゆう子は言った。「お母さんは何と言っているの？お母さんもおじさんと

結婚したいと言っている？」

「いや、お母さんはまだ迷っているようだ。お母さんは心配なんだよ。ゆう子ちゃんかぼく

を好きかどうか、お母さんは心配している。だから、結婚するかしないか、迷っているん

だ。」

「そう・・・お母さんは迷っている・・・もしわたしが、お母さんの結婚はいやだと言っ

たら？」

「そうしたら、お母さんは結婚しないよ。」

「じゃ、おじさんはどうする？私を殺す？私がいなかったら、お母さんは迷わない。お母

さんが迷わなかったら、おじさんはお母さんと結婚できる。だから私は邪魔、邪魔な私

を殺す？」

「何を言ってるんだ。ゆう子ちゃん、お母さんの大切な大切な子供だよ。」

ゆう子は何も言わなかった。車の中は静かになった。

「おじさん」とゆう子はまた話しかけた。「お母さんに電話したらいいよ。ゆう子を返して

ほしいか？ゆう子を返してほしかったら、ぼくと結婚しろ。」

結婚しなかったら、ゆう子を返さなと言えはいよ。」

「いいんだよ、結婚できなくても。無理ならしかなかったら？」

「そっか、おじさんはお母さんを愛していないの？」

(いや子供だな。子供がいると結婚はむずかしい)と竜彦は心の中で思った。

「おじさん」とゆう子はまた口を開いた。「お母さんと結婚して赤ちゃんが生まれたら、私が邪魔になるでしょう？赤ちゃんがかわいいから。」

(7歳の子供が何を考えているのだろうか？) 竜彦は二わく二わくした。

(こんなにかわいい顔をしているのに、頭の中で何を考えているのかわからない。)

運転しながら、竜彦は思った。(この子を育てた千絵さんを、ぼくはよく知っているのだから)

「うか？千絵さんと結婚して、ぼくたちはいい家族になれるのだろうか？」

これまで、ゆう子の母・千絵と結婚したいと思っていたけれど、今、千絵との結婚を迷い始めた。

ね。まだ行こうね。」

あたりは暗くなり、走る車はみんなライトをつけている。竜彦の車もライトをつけて走っている。車の中で、ゆう子は寝ている。竜彦の車は、小さい家が並ぶ住宅街に入ってきた。そして、小さい庭のある家の前で止まった。竜彦はゆう子を起こし、「さあ家に着いたよ。」と言った。ゆう子は目を開けた。「どうもありがどう、おじさん。楽しかったね。まだ行こうね。」

あたりは暗くなり、走る車はみんなライトをつけている。竜彦の車もライトをつけて走っている。車の中で、ゆう子は寝ている。竜彦の車は、小さい家が並ぶ住宅街に入ってきた。そして、小さい庭のある家の前で止まった。竜彦はゆう子を起こし、「さあ家に着いたよ。」と言った。ゆう子は目を開けた。「どうもありがどう、おじさん。楽しかったね。まだ行こうね。」

「いや、もう行かない。さ、車を降りて家に入りなさい。」

「おじさんは？お母さんに挨拶しないの？『こんばんは』と言わないの？」

「言わないよ。もう遅いから。はやく降りて家に入りなさい。ここで見ているから。」

「でも、おじさん。」とゆう子が言った。「私が家に入ったら、悪い人がナイフを持って

お母さんに『金を出せ』と言っているかもしれないわ。そうしたら、おじさん、どうする？」

お母さんに挨拶しなければいけないわ。『だいたい、今、帰ってききました。』と言わなければ

いけないわ。」

「わかった、わかった。挨拶しよう。『帰ってききました』と言おう。今夜が最後かもしれない

から。」

童彦は車を降りて、小さいゆう子の手をとった。

(小さくてやわらかい手だな。) 童彦の心が優しくなった。

家のドアが開き、中からゆう子の母、千絵が出てきた。ゆう子とよく似た美しい顔、長い

髪。まだ2歳か3歳に見える。「だいたい」とゆう子は元気に言った。

「今日は本当にありがとうございます。おかげさまで仕事も全部、終わりました。私も

一緒に行きかけた。」と千絵は童彦に言った。そして、ゆう子を見た。「ゆう子、楽

しかった？おじさんと一緒によかったね。」

童彦は千絵に挨拶をして、車に乗った。ゆう子が「さよなら。おじさん。」と言いな

から手を振った。

(2)

夜、千絵が病気になるって病院へ行った。千絵はじつなるのだから？

小さいゆう子はひとりで大丈夫だろうか？

助けてくれる人はいるだろうか？

三日後の午前二時、竜彦のアパートの電話が鳴っている。竜彦は、ベッドで寝ている。電話

は鳴り続けている。竜彦は目をさました。「もしもし」電話の向こうで、ゆう子が大きい声で

言った。「おじさん！お母さんが病気になる。助けて。」

「お母さんが病気になる？ それなら、お祖母ちゃんかおばさんに電話をしろよ。今、午前二時だ

よー」と竜彦は怒って言った。

「お祖母ちゃんはずっと遠くにいるの。九州にいるの。」

「じゃ、おばさんに電話しろよ。」

「おばさんはいないの。おじさん、助けて。お母さんが死にそうなの。」電話の向こうのゆう子

が泣いている。

「いか？すぐ行くから。」

竜彦は（仕方ないなあ）と言いつつ、ベッドから出た。「じゃ、救急車を呼べ。119だ。

竜彦はゆう子の子の家に着いた。救急車が家の前に止まっていて、ゆう子が車のそばに

いた。ゆう子は黒いかばんを大切に持っている。「おじさん、来てくれてありがとう。」

「そのかばんは何？」

「これ？お母さんがいつも言っていたの。大切なものが入っているから、何かあったら持つ

ていきなさいって。」

「ご親戚の方ですか？」と救急車の人が竜彦にきいた。

「いえ。この家の近くに住んでいます。」

「あ、そうですか。病気の人は救急車の中です。急いでください。この子供といっし

よに救急車に乗って下さい。いっしょに病院へ行ってください。」

救急車が病院に着いた。病院から
3, 4人の看護婦が出てきて、千絵を手術室
へ運んだ。竜彦とゆう子も手術室へ行き、
部屋の前椅子に座った。二人は心配そうに
手術室のドアを見ている。竜彦はゆう子に
小さい声で言った。「お母さんはどうしたの?」
「頭が痛い、痛いと言ったの。それでお
じさんに電話したの。」



「親戚の人に来てもらわなければならぬ。近くにいる人はだれ?」

「おばあちゃん」

「おばあちゃんは九州だろ?」

「そう、九州よ」

「ほかにいないのか?」

「お母さんの弟がいる」

「じゃ、その人に電話しなければ、どこにいるの?」

「アメリカ」

「えっ? アメリカ? アメリカのどこ?」

「オレゴン」

「じゃ、すぐ来られないじゃないか。お父さんの親戚は?」

「お父さんの親戚? 知らない」

「じゃ、しかなない。おばあちゃんに電話しよう。電話番号がわかるか?」

竜彦は携帯電話をポケットから出した。ゆう子はかばんの中を探して小さい入りを
見た。

「あつた。おばあちゃん
の電話番号。」

竜彦は茶タンを押して、ゆう子に携帯電話を渡した。

「もしもし、おばあちゃん。私、北海道のゆう子です。おばあちゃん
寝ていた？」

なさい。あのね、お母さんが今、入院したの。ちよつとおばあさんに代わります。」

「あ、初めまして。野崎と申します。私はゆう子ちゃんの家
の近くに住んでいますが、千絵さんが救急車で運ばれて、入院
されたんです。はい、はい、そうです。それで、すぐに手術を
しなければならぬそうです。できるだけ早く北海道に来て
いただけますか？ゆう子ちゃん
が一人で大変ですから。」

電話の向こうの人が言った。「お世話になります。でも、私も
今ちよつと大変で、北海道

へ行かないんです。もう少し、二人のことをお願い
できませんか？」

電話を切つて、竜彦は入院のための書類を書き始めた。書類を隣
から見ていたゆう

子がきいた。「おじさんの名前は竜彦？」

「そうだよ。い名前だろう？でも、本当に親戚の人は
いないの？」

「うん、いない。だから、お母さんにはおじさんがとても大切
だったの。おじさんが『お母さん
と結婚しない』と言つたでしょう。お母さんは『悲しい、悲しい』
と言つて毎晩、泣きながらお酒を飲んで
いたの。ね、おじさん、お母さんの手術が
終わるまでここにいて。」

竜彦がやさしくなると、ゆう子は安心して目を閉じた。

(3)

竜彦とゆう子と千絵は、いつ、どこで知り合ったのだろう？

安心して寝ているゆう子の隣で、竜彦は思ひ出していた。

——3ヶ月前の日曜日だった。

千絵がカーブを押しながらスーパーの中を歩いている。美しい千絵の隣には、かわいいゆう子がいる。二人は楽しそうに話しながら食べ物を選んでカートに入れている。二人はレジでお金を払い、品物を袋に入れ始めた。

「あらあら、こんなになくさん買ってしまった。重くて持って帰れないわ。困ったわね。どうしよう?」と千絵が言った。

「大丈夫。私が持つから。うわ、重い。二人は幸せそうに大きい声で笑った。

竜彦は、ゆう子の隣で牛乳や卵を袋に入れていたが、楽しそうに二人の話の聞いていつしよに笑ってしまった。

かわいいゆう子が竜彦の顔を見てまた笑った。

ぼくの車に乗ったらいいよ。家まで送ってあげよう。」

「うわ、嬉しい。お母さん、よかったね。」

あの日から、週末はいつも三人でドライブした。いつも三人だった。——

(三人だったから、千絵さんと二人だけで話したことはなかったなあ。)と

ゆう子の寝顔を見ながら竜彦は思った。

(4)

千絵のお母さん・ゆう子のおばあさんは病院へ来ることができたらどうか?
千絵の家族は、どんな人たちだろうか?

手術室のドアが開いた。

「先生、手術は・・・」竜彦は立ち上がりてきていた。ゆう子はよく寝ている。「終わりました。手術はうまくいきました。が、まだ安心してできません。血がたくさん出たんです。私

「できることは全部しました。あとは、病人が頑張るだけです。」

「どうもありがとうございます。」

竜彦は頭を下げた。

手術室のドアが大きく開いて、千絵を乗せたベッドが、4人の看護婦に押されて出てき

た。ゆう子も目をさまし、竜彦といっしょに千絵を見た。千絵は白い包帯で頭を巻かれ

目を閉じている。「お母さん」とゆう子は心配そうに、包帯で頭を巻かれた千絵に呼びか

けた。

「大丈夫よ。お母さんはよく頑張ったわ。今、薬で寝ているの。もう少し待つてね。お

母さん、もうすぐ目をさますから。」と看護婦が言った。それから、竜彦を見て、「病人を
これから病室へ運びます。2、3日はだれがこの病人のそばにいてください。」と言っ
た。

「はい、だれか親戚の者が来ると思いますが、もう一度電話をしてみます。」

千絵が病室に入ったのを見て、竜彦はポケットから携帯電話を出した。ゆう子に電話

番号を教えてもらい、竜彦はボタンを押した。

「もしもし、北海道の野崎ですが、おはようございます。今、手術が終わりました。手術

はうまくいったそうです。でも、血がたくさん出たそうです。それで、まだ安心してきないそう

です。それで、2、3日は親戚の人にそばにいてほしいそうです。」竜彦が言うと、電話の

向こうでゆう子の祖母が言った。

「本当に、本当に有難うございます。すぐに北海道に行きたいのですが、私の夫が

あ、千絵の父ですが、病気で私が世話をしなければなりません。毎日の世話が大変な

んです。私も体が弱くて……。それで、

千絵に九州に帰ってきてほしいと思つて

いたのです。」

「はあ……。それは大変ですね。千絵さんの

兄弟は？ 弟さんがいらつしやるのでしょ

う？」

「それが、アメリカにいて、帰ってくるの

はちよつと……。」

「遠くて大変でしょうけれど、千絵さんが死

ぬかもしれないのですよ。お帰りになれないで

しょうか？ 電話をなさいましたか？」



「はい、すぐに電話をしたのですが、息子は、千絵の弟ですが、二日前に事故にあつて

入院しているらしいのです。手術をしたばかりだったので、息子は帰ることができません。

息子の妻がアメリカ人で、日本語がよくわからないんです。ですから、アメリカ人の妻が

北海道に行つても、なにもできないでしょう……。本当にすみません。」

「それは大変ですね。でも、私も困ります。ほかに親戚の方はいらつしやいませんか？」

「ええ、いいんです。私は兄弟がいまして、千絵の父には、弟が二人いますが、一人

は家族みんながオーストラリアに住んでいます。もう一人はもうなくなりました。」

「はあ……。じゃ、ゆづちゃんのお父さんはどうでしょうか？ ほくほくはよく知らないのですが、

もうなくなつたのでしょうか？ 千絵さんは離婚して聞いていますか？」

電話の向こうが静かになった。竜彦の質問に答えたくないようだった。

電話の向こうから声が聞えた。「ゆう子の父親はなくなりました。ゆう子が生まれてすぐに

なくなつたのです。名前を一郎さんといいますが、この一郎さんのご家族は一郎さんが

千絵と結婚することに反対でした。私は、一郎さんのご家族がどういふ方たちなのか、

ぜんぜん知らないのです。」

「だけど、ゆう子ちゃんは一郎さんの子供ですから、一郎さんのご家族がゆう子ちゃん

世話をしていでもいでしょう。普通の時ではないんですから。」

「はあ・・・。本当にすみません。一郎さんのご家族が今どこにいるのかも知らないの

です。千絵は知っているかもしれないかもしれませんが、本当にすみません。今お願いできるのは、あなた

だけなのです。」

「それは、まあ、できることはしますが、ぼくは男ですし、結婚もしていませんから、女性

の千絵さんや子供のゆう子ちゃんの世話はできません。」

「すみません。どうぞよろしくお願ひします。ぜんを野崎さんにお任せします。」

「いやあ、それは困るのです。責任はとれません。」

「けいこです。責任をとらなくてもけいこです。どうなつても、何も言ひません。お任せ

したんですから。」

「ぼくのことを何も知らないのに、大切な千絵さんをぼくに任せるのですか?」いえ、野崎

さんのことは千絵から聞いています。ですから、私は野崎さんを信じているのです。私た

ちのお願ひは手紙に書きますから、ご住所を教へていただけませんか?それからお電話

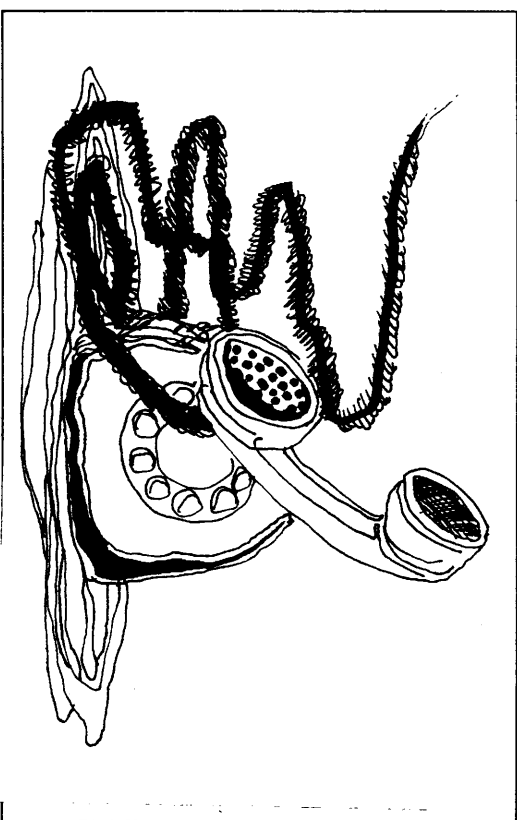
番号も。」

竜彦は、しかたがないと思ひながら、住所と電話番号を教へた。

「有難うございます。では、よろしくお願ひします。」

「あ、千絵さんはぼくのことをお母さんに話していただけますか?ぼくが千絵さんに初めて

あつたのは3ヶ月前なんです。
 「ええ、ええ、聞いています。野崎さんはいい方で
 できたら結婚したいと千絵は言っていました。でも
 子供がいるからお辞めかしらね」とも言っていました。
 「そうでしたか・・・」
 「あ、すみませんが、ゆう子に代わっていただけます
 か？ちよつと話したいことがあります。」
 「あ、はい、今、代ります。」
 竜彦は電話をゆう子に渡した。
 「もしもし、おはあちゃん、ゆう子です。はい、はい、



わかつた。おばあちゃんも元気でね。」ゆう子は電話を竜彦に返した。竜彦は電話を切つ
 てポケットに入れたから言った。「ゆう子ちゃんの家族はどんな家族なんだ？どうして、みんな
 いっしょに病気になるのだから？ゆう子ちゃんのおじいちゃんか病気が、おじさんは事故で
 入院、お母さんも病院。どうしたらいいんだ？困つたなあ。ゆう子ちゃん、そのか
 ばんの中にお父さんの親戚の住所や電話番号が入っていない？それからお母さんの
 会社の電話番号。ゆう子ちゃん、今日は学校、どうする？休む？じや、学校に電話で
 しなければいけない。ほくも会社どうしようかな。仕事、忙しいんだよ、困つたな。」

(5)

千絵は自さますだろうか？

千絵の会社の人は助けに来てくれるだろうか？

竜彦とゆう子は千絵の病室にいる。ゆう子はかばんから中のもをひとつひとつ出して見ている。財布、銀行の通帳、カード、印鑑、鍵などが椅子に並んでいる。

「おじさん、お母さんの会社の電話番号があった。手帳をかばんから出し、会社の電話番号を見つけて、ゆう子が言った。」

「この会社か？何をやる会社？」

「アッシュンヨーとかパーテーターとかをやる会社よ。おじさんは？」

「ぼくはコンピュータの会社。」

「ゲームを作るの？」

「うん、ゲームも作るよ。」

手帳を持っているゆう子に竜彦は言った。

「次はお父さんの親戚だ。手帳の中に名前がないか？電話番号はないか？」

「ない。」

「ない？じゃ、その手帳を見せて。ぼくが探そう。お父さんの名前は？」

「知らない。」

「知らない？じゃ、探せないな。ではお母さんの会社に電話をしよう。」と言って竜彦は

携帯電話をポケットから出し、ボタンを押した。それから、竜彦はあちこちに電話をし

た。

「ゆう子ちゃん、お母さんの会社の人はいくらも来られないぞうだ。それから、ゆう子ちゃん

の学校の先生に電話をしておいた。今日は休み、と言っておいだから大丈夫だ。」

「おじさんの会社は？」

「ああ、電話をしますよ。」

「大丈夫？」

「ん・・・結婚してないのに、どうして

そんなに親切にするのかって言われたよ。」

「そう・・・ねえお母さん。きのうお母

さんと結婚したと思っただらどう？ そうしたら

、おじさんがお母さんや私のために会社を

休んでも変じやないでしょう。」

「うむ、そうだね。そうしようか。よし、じゃ

、そうしよう。ゆう子、まず、朝ご飯だ。

朝ご飯を食へに行こう。」

「おじさん、どうしてゆう子って言うの？ 今

までゆう子ちゃんって言うていたのに。」

「お母さんとおじさんは昨日結婚したんだ。だから、ゆう子はほくの子供だ。ゆう子、ちあ

朝ご飯だ。ごはんを食へに行こう。」

二人は病室を出た。

朝ご飯を食へて、二人はまた病室へ行った。

千絵は寝たまままだ。目をさまさない千絵をを心配そうに見て、ゆう子が言った。

「おじさん、お母さんはいつ目がさめるの？」

「手術が終わってから時間・・・はやく目がさめるといいね。」

その時、だれかが病室のドアを静かにノックした。竜彦はドアを開けると、背の高い優

しそうな女の人が、大きいかばんを持って立っていた。竜彦は女の子を見て、「やあ、



来てくれてありがとう。」と言った。

「頼みます。来てくれて本当に助かるよ。」と言いつつ、童彦は立ち上がり、女の人を病室へ入れた。病室では、ゆう子が疲れた顔で千絵を見ている。千絵はまだ寝ている。「ゆうちゃん、こちら、ぼくのお母さんだ。野崎保子。ぼくたちを助けるために東京から来てくれた。」

「まあ、かわいいわね。ゆうちゃん、こんにちは。」

「ゆうちゃん、これから家に帰って休みなさい。このおばさんをいじめちゃだめだよ。」

「いじめる？ いじめたりしないわね。ゆうちゃん。」

「ぼくはゆうちゃんにいじめられているんだ。」と言いつつ、童彦は財布からお金を出し

た。「母さん、これ。」

「大丈夫よ、私も少しお金を持っているから。」と保子が言った。

「いや、必要なお金は今はほくが出ず。けれど、後でこの千絵さんから返してもらおう。だから、このお金をタクシーや食事に使ってほしい。」

「じゃ、もらっていくわ。」

ゆう子と保子がゆう子の家に帰り、童彦は一人、千絵の病室に残った。

千絵が苦しそうな声を出した。童彦は驚いて千絵を見た。とても苦しそうな顔だ。童彦は

は急いで、看護婦を呼んだ。看護婦は千絵を見て、大急ぎで医者を呼びに行った。童彦は

心配になった。医者も看護婦も病室に来た。童彦は静かに病室を出た。

看護婦と医者が出てきて、童彦に言った。

「まだ、血がたぐさん出ました。とても心配です。」

「大丈夫でしょうか？」

「大丈夫？ わかりません。心配です。家族や親戚の方を呼んでください。」

竜彦は千絵の病室に入った。千絵の顔は青くて、死んでいるようだった。

(6)

千絵は元気になるだろうか？

竜彦は会社へ、ゆう子は学校へ行くのだろうか？

小さくて白い箱をもってゆう子が車に乗っている。運転しているのは竜彦。一人は黒

い服を着ている。「お母さんは骨になってこの箱に入っている。お母さん、こんなに小さ

くなってしまった・・・。」

「ん・・・。」竜彦は何と言ったらいいかわから

ない。「私、一人になってしまった・・・。」

竜彦はゆう子の肩を抱いた。

「私、どうなるの？」

「これから飛行機に乗って九州のぼばあちゃん

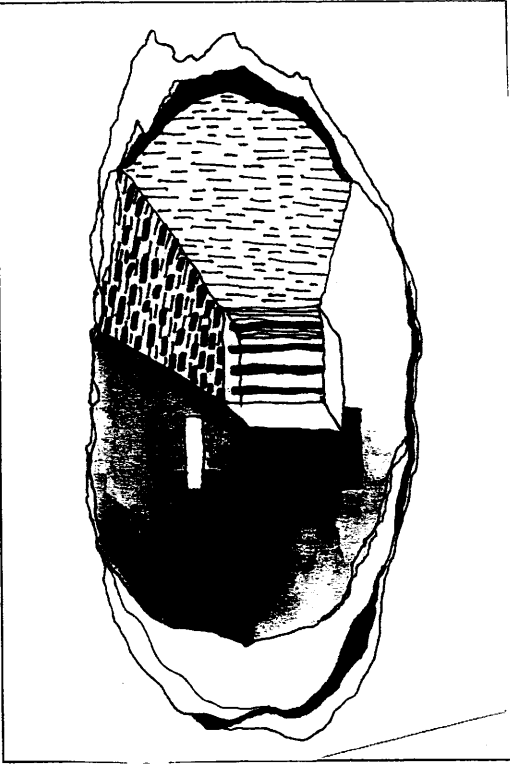
の家に行く。ぼばあちゃんがゆう子のためににか

考えてくれるよ。」

「でも、ぼばあちゃんは病気でしよう。ぼばあ

ちゃんの病気、悪いんだって。ぼばあちゃんは

おかないし、私が行ったら、ぼばあちゃん



大変になるよ。」

「や、アメリカへ行く？アメリカのオレもへ行く？」

「おじさんは事故にあつて今、病院にいる。」

「すぐ元気になるよ。」

「わからない。元気になるいかもしれない。おばさんはアメリカ人だし、私は英語がわからないし……。」

「うん、でも、ゆう子は若いから、英語をすぐ覚えられるよ。」

「若すぎるわ。」

ゆう子は悲しそくに竜彦を見た。竜彦はゆう子を強く抱いた。

九州の空港に飛行機が着いた。飛行機から白くて小さい箱を大事そうに持ったゆう子

と大きいかばんを持った竜彦が出てきた。「お母さん、九州に着いたよ。」とゆう子は白

くて小さい箱に話しかけた。

二人は空港からバスに乗った。竜彦もゆう子も九州に来たのは初めてだった。

バスを降りて二人は古い大きい家の前に立った。ゆう子がドアを開けようとした時、中か

らる0歳くらいの子の人が出てきた。髪が少し白くなっているが、千絵に似てきれいな人

だ。千絵の母、啓美子だ。

「あつーゆう子ちゃん！よく来たね。大変だったね。」啓美子はゆう子を抱いた。それから

竜彦を見て、「本当にお世話になりました。すみませんでした。」

あの、主人が出かけてしましまして。今、警察から電話がありましたので、主人を迎え

に行つてきます。ゆう子ちゃん、疲れたでしよう。冷蔵庫の中にジュースが入っているから

をトイレへ連れて行った。

ゆづ子は台所へ行き掃除を始めた。そして冷蔵庫から氷を出して、登美子の足の土においた。

千絵はやさしいなあ。やさしい子だ。」と将之介はゆづ子を嬉しそうに見た。

菫彦は、3人を驚いて見ている。

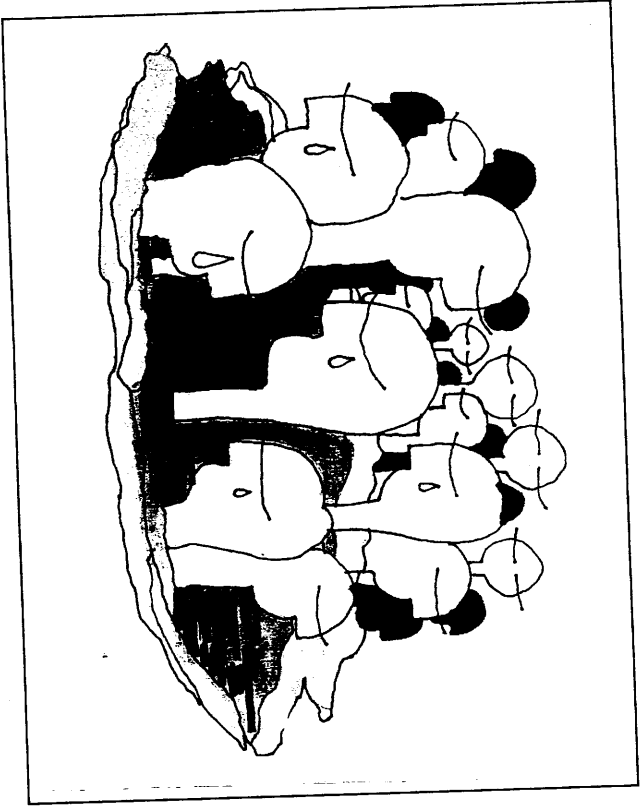
(7)

ゆづ子は九州にいくことができるだろうか？

登美子は元気でゆづ子の世話をすることができただろうか？

次の日、登美子の家の大きい部屋にたくさんの方がいる。ゆづ子も菫彦といっしょにいる。

登美子の隣に将之介が座っている。千絵の葬式が始まった。



みんな黒い服を着ている。将之介が大

きい声で登美子に言った。「おい、登美子、

千絵はどこだ？たくさんの方が来ているの

にどうして千絵はいないのだ？千絵を呼び

なさい。おい、千絵、みなさんに挨拶を

しなさい。」登美子は困った顔をして、

菫彦を見る。みんなも困った顔をしてい

る。

「おじいちゃん、お母さんはあそこ、あそ

こにいるの。」とゆづ子が白くて小さい箱

を指さす。

葬式が終わる、家の中は静かになった。

「疲れたね、お茶でも飲みましょう。」と登美子はゆう子に言っ、立ち上がった。が、「あ

と言っ倒れてしまった。

「おはあちゃん、ゆう子が驚いて登美子を見た。

次の日、登美子の家の大きい部屋にたくさんの方がいる。ゆう子も童彦といっしょにいる。

ゆう子の隣に将之介が座っている。登美子の葬式が始まった。

みんな黒い服を着ている。小さいゆう子を見て泣く人もいる。

葬式が終わった次の次の日、家の中はとも静かだ。家に登美子はもういない。将之介

もいない。

「まあ、おじいちゃんにさようならを言いに言った。」と童彦がゆう子に言った。童彦とゆう

子はバスに乗っ、将之介のいる病院へ行った。

「おじいちゃん、さようならを言いに来たの。」

「ああ、千鶴、北海道に帰るのか？私も家に帰りた。登美子はどこにいる？私も家

に帰るよ。登美子、登美子、いっしょに帰ろう。登美子はどこにいる。」

「おじいちゃん、とゆう子は静かに言った。

「私はゆう子、私、アメリカへ行くの。」

「え？アメリカ、どうしてアメリカへ行くのだ？勉強しに行くのか？こんなに小さいの

に、アメリカへ勉強しに行くのか・・・。」

「おじいちゃん、私、源之丞おじいさんの家へ行くの。」

「源之丞おじいさん？源之丞おじいさん？源之丞・・・。ああ、源之丞。源之丞はどこにい

る？」

「アメリカにいるのよ。」

「アメリカ？ほね、アメリカか。そうか。アメリカにいるのか。で、千絵、千絵は北海道に帰

るのか？」と将之介は言つて、童彦を見た。

「あなた、すみませんが、千絵をお願いします。」

「はあ……。」

「おじいちゃん、一人になってしまつね。ごめんささい。私、大きくなつたらおじいちゃん

の世話をするから、それまで待つていてね。」

「ああ、私は大丈夫だ。登美子が来てくれるから。」

童彦とゆう子は、病院を出た。バスを待ちながら童彦が言った。

「おじいちゃん、おばあちゃんもお母さんも源之丞おじさんわかるのに、今のことかわ

からないみたいだね。」

「そう。前のことは忘れない。でも、新しいことは覚えられないみたい。」

「ゆう子を千絵さんだと思つている。」

「うん。」

「ゆう子のお父さんのことはよくわからないみたいだね。」

「おじいちゃんはお父さんにもあまり会つたことがなかったから。おじいちゃんを私のお父さんだ

と思つている。おじいちゃん、いじやない？おじいちゃんはお母さんと結婚したかったのだから。」

「そだねえ……。いめんね。お父さんになれなくて。オレゴンは寒いよ。北海道と同じ

くらい寒いよ。」

「うん。九州に住めたらよかつた……。九州のほうが暖かいから。」

ゆう子はどこ行くのだから？

ゆう子は幸せになれるだろうか？

飛行機がアメリカ、オレゴンのポートランド空港に着いた。竜彦とゆう子が飛行機を降りた。

「おじさん、アメリカに来てしまったね。」

「うん、ゆう子を送りにアメリカまで来てしまった。」

「よかつたじゃない。九州にも行けたし、今度はアメリカまで来られて。」

「よかつた？ 会社をやめさせられたんだよ。ま、これが最後だ。これでゆう子とわたしはな

らだからね。ゆう子、いい子にして、おじさんとおばさんに可愛がってもらおうんだよ。」

「うん。あ、あの人、キヤサリンおばさんよ。写真で見たとおなじがある。」

「エシヤツにジーンズの背の高い女性がゆう子に手を振りながらこちらへ来る。ゆう子が大き

い声で言った。「キヤサリンおばさんですか。」

「ハ、ハ、ゆう子。」と女性が大きい声で答えた。

「アイアム タツヒコ ノザキ。ハウ ドウ ヲウ ドウ」と竜彦は言った。

「はじめまして。キヤサリン・テラー・カヤシマです。」とキヤサリンはきれいな日本語でゆう

くり言った。

三人はキヤサリンの車のほうへ歩いた。

大きくて青い車の前でキヤサリンが「さあ、どうぞ。」と言いながらドアを開けた。

「すごい車ね。おばさん。この車はリンカーン？」ゆう子は嬉しそうに車に乗った。

「エウコ、私はキヤサリン。キヤサリンと呼んでください。」

「はい」とゆう子は広い車の中を見ながら言った。

龍彦はゆづ子の大きな車を車に乗せてから、車に乗った。「ゆづ子、ゆづ子は前に乗せてもらいなさい。ぼくはこの広い席にひとりで座ろう。」

「あ、アメリカでは、子供は前の席に座ってはいけないのです、ミスター・ノザキ。」

「あ、そうですか。キヤサリン、ぼくをタツと呼んでください。」

「タツ？ はい、わかりました。では行きましょう。」

大きくて青いリンカーンが走りだした。

木が多くて静かな街の中には、車が少ない。人もあまりいない。街を通り、それから

川のそばを走って、橋を渡った。

「きれいねえ。きれいなえ」とゆづ子が窓の外を見ながら言う。

「うん、静かでいいところだね。」と竜彦も窓の外を見ている。

30分くらい走って、車は白い家の前で

止まった。家の前には広くてきれいな庭が

ある。庭にはプールもある。遠くには白い

山々が見える。白いは雪だ。

「すばらしい！いいところだね！大きい

家と広い庭。」と竜彦はあちこちを

見ながら言った。

「日本は家が高いそうですね。日本では

お金がなかったら、このような大きい家に

は住めない」と源之丞が言っていました。



でも、アメリカではこのような家は普通です。」とキヤサリンが言った。

「どんなお仕事をなさっているんですか。」と菫彦がきいた。

「テレビの仕事です。」

「キヤスター？」

「いえ、キヤメラマンです。」

「ああ、そうですか。ご主人は？」

「主人はアメリカにある日本の会社で働いています。今は、会社を作っ

て仕事をしています。」

大きい声かゝって聞かされた。「おおい。ゆう子、元気で着いたか？」

「あ、おじさん。源之丞おじさん！」ゆう子は走って階段を上がった。

菫彦も階段を上がって2階へ行った。

「はじめまして。野崎です。ゆう子ちゃんを連れてきました」

「萱島源之丞です。たいへんお世話になりました。本当に有難うございました。」

二人は挨拶をした。千繪の弟の源之丞は、ハンカチだ。

「足はいかがですか？」

「おかげさまでだいぶよくなりました。でも、まだ歩けません。車椅子に乗っています。」

「大変ですね。大変なのに、ゆう子ちゃんを連れてきてしまいました。」

「はい、ゆう子は私たちが育てます。キヤサリンは、仕事をしながら私の世話をし、これ

からはゆう子の世話もしなければなりません。でも、ゆう子はひとりでもできると言っ

ます。私たちのことは心配ありません。」

「ええ、ゆう子ちゃんには、元気でい子供です。新しい生活も心配ないと思います。」

キヤカリンさんも働いそうですね。」

「ええ、キヤカリンはとても働い人です。ゆう子を可愛がってくれなと思ひます。」

「ゆう子ちゃんも、今度は幸せになれますね。お母さんもおはあさんもお、上くなつてしまひ

ました。お父さんもお上くなつた聞いています。」

「ゆう子には、お父さんはいないのです。」

「え？」

「姉は結婚しませんでした。ゆう子を産んだのです。」

「そうですか。千絵さんの上な人を捨てるなんて、ばか男だ。」

「いや、姉が相手の人を捨てたのです。姉は、結婚するつもりはなかったのです。でも、子供

はほしと言ひつていました。」

「そうですか。でも、子供にはお父さんも必要ではないでしょうか。千絵さんに弟が

いて、本当によかつたと思ひます。これからは、お父さんとお母さんがいふ普通の子供の
生活ができますから。」

二人が話しているとき、ゆう子がきた。

「おじさんたら、はんですよ。」

ゆう子は、源之丞の車椅子を押し、食事の部屋へ行つた。

千彦もゆう子の後から食事の部屋に入つた。

テーブルの上には、パン、チーズ、ハム、サラダなどいろいろなもの置いてある。

「好きなものをもつて、サンドイッチにして食べるのよ。」とゆう子がつた。

「おいしそうだな。あ、そうそう、ゆう子のかばんはまだ車の中だ。取りに行かなければな

らない。」と千彦がつた。

(9)

竜彦は北海道へ帰った。

「新しい仕事が見つかるだろうか？」

飛行機が北海道の空港に着いて、中からかばんを持った人が降りた。

「ああ、終わった、終わった。ぜんぶ終わった。明日から、仕事を探そう。」

竜彦は青くてきれいな北海道の空を見上げた。

広い部屋にたくさんの机があり、机の上にはコンピュータが並んでいる。

コンピュータの前で仕事をしている人も、電話で話している人もいる。話し合っている

人たちもいる。男の人も女の人も若い。

ドアが開いて、竜彦が部屋に入ってきた。

「おー、野崎君」と部長が大きい声で言うと、部屋のみんなが竜彦を見た。

部長は0歳、4歳くらい、大きい男の人で、声も大きい。

「長い間、休みました。申し訳ありませんでした。」と竜彦は部長の前に行き、ポケ

ットから白い封筒を出した。封筒の上には「辞表」と書いてある。

「なんだ？辞表？この会社をやめるのか？新しい仕事をみつけたのか？」と部長が言った。

「いえ、これから探します。昨日、北海道へ帰ってきました。」

「どこから？」

「オレゴンからです」

「オレゴン？」

「はい、アメリカです。」

「アメリカ・・・何をしていたんだ？」

「いろいろな大変なことがありましたので、とても長い話です。」

「長い話？長い話は暇な時に聞くよ。で、これは何だ？」と部長は辞表と書いてある白い封筒を手を持って、竜彦に言った。「2ヶ月も会社を休んで、久しぶりに会社へ来た。会社へ来たのは、この辞表を出すためか？この会社はとても忙しいんだ。それを知っているのに、辞表を出すのか？」

「でも部長、私が電話で『休ませてください』と言ったら、会社をやめて、辞表を出せとどつしやっただけありませんか。」

「ああ、あの時は……。いいから、早く仕事をしろ。仕事は山のようにあるんだ。」と言つて部長は竜彦の「辞表」と書いた封筒を破つて捨てた。

竜彦は自分の机に行くと、部長が今までよりもっと大きい声で言った。

「野崎君が会社へ帰ってきた。今晚は、みんな飲もう。」

部屋の中から「オ」という声があった。みんな嬉しそうだ。

「みなさん、長い間、休みました。すみませんでした。」竜彦は頭を下げた。

夜、竜彦は会社の人たちといつしよにビールを飲んで、部長が来て、竜彦の前に座

つた。竜彦は部長のグラスにビールを入れた。

「おい、野崎君。」と部長はビールを一口飲んでから言った。「いい人がいるんだ。結婚し

ないか？」

「結婚？結婚ですか……。結婚、家族……。いいですね。普通の幸せな家族がい

ですね。家族がないのは淋しいですから。」

「あ、野崎君、そう？結婚したい？それはいい。いい人がいるんだ。紹介しよう。」

(結婚か……。) 竜彦は心の中で思った。(ゆう子はじょうしているだろう。アメリカで楽

しく生活しているだろうか？ゆう子の母の千絵、祖母の登美子、祖父の将之介、千絵の弟

①源之丞、病氣になつたり、事故にあつたり、死んでしまつたり……あの家族にはいる
 いるなとがねる。どうしてだろ？
 いや、ゆづりとはさよならをしたんだ。ゆづりのことはもう聞かされた。
 ぼくももう32歳。普通の幸せな家族を持つことを考えた。(5)

(10)

童彦は、普通の幸せをみつけることができるだろうか？

北海道に、初雪が降つた。これから寒くなる。
 街の木々も道も真つ白だ。白い道を、童彦とゆかりが手をつないで歩いている。
 ゆかりは背が高く、髪が長くてきれいな女の人だ。青いコートを着て、黒くて長い靴をはいている。

「ゆかりさん、スキーは好き？」

「ええ、大好き。」

「冬の休みに、どこかへスキーに行つたか？」

「ほんとうらしい！」

「どこがいかな？」

「考えましよう、いつしよば。クリスマスに。」

「クリスマスは時間がある？」

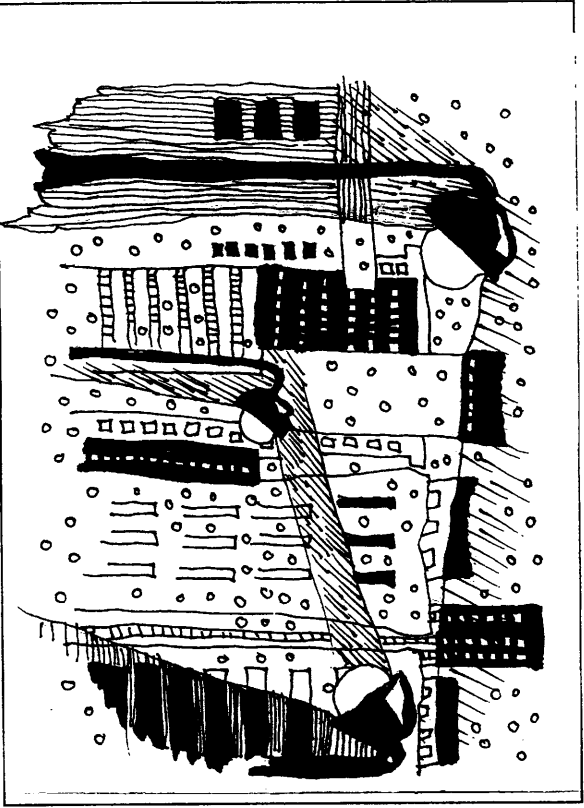
「ああ、今はどうも忙しければ、クリスマス

「ええは大丈夫だと思う。」

「そう、よかつた。じゃ、ホテルのレストラン

で食事をする？予約しておく。

12月24日、クリスマス・イヴね。何時が



「い？」
二人は、楽しそうに話しながら、白い道を歩き続ける。

(11)

クリスマス・イブにゆう子から電話があった。ゆう子はどこにいるのだから。
菫彦とゆう子、イブはじりになるのだから。
源之丞とキヤカリ、はじりしたのだから。

部屋の下が開いて、菫彦が入ってきた。とても疲れた顔をしている。
「あ、終わった終わった。今年の仕事は全部終わった。」菫彦が言くと、「苦労さん。」野崎
君、目が真つ赤だよ。」と部長が大きい声で言った。
「はい、三日間、寝ないで仕事をしましたから。」

「早く家へ帰って寝たほうがいい。」

「部長、今日はクリスマス・イブですよ。家に帰って寝る？そんなことほできません。ゆかりさんといつしよにホテルで食事、ね？野崎さん。」
とそばの女の人が菫彦を見て笑いながら言った。
「早く結婚しろよ。」と男の人が言った。みんな、菫彦の顔を見て笑った。

その時、電話が鳴った。

「はい、え？野崎？はい、います。少しお待ちください。野崎さん、電話。」

「はい、野崎です。」

「おじさん？」

「ゆう子、ゆう子……！元気がどうしている？そちらのクリスマスアははじり？今、何時だ？」
「おじさん、ゆう子がいないなくておびしいですよ。」

「ゴひしい、ゴひしい。ゴひしくて毎晩泣いているよ。」と童彦は全然ゴひしくなそうに言った。

「おじさん、ゴひしてしまふ。だから、私、私、帰ってきてあげた。」

「えっ？」

「今、成田についたところ。これから北海道行きの飛行機に乗る。16時35分に着くから、おじさん、迎えに来てくれる。荷物が重い。」

「なんだって？ゆづ子、キヤカリンが『日本へ帰れ』と言ったのか？どうしたんだ？」

「おじさん……。源之丞おじさんがいなくなってしまうの……。」と電話の向こうでゆづ子が泣きだした。

「なんだって？ゆづ子……。もしもし、ゆづ子……。どうしたんだ？」

「源之丞おじさんがいないの……。」

「どうして？」

「家を出たまま、帰ってこないの。」

「家を出たまま帰ってこない？どうして？」

童彦の大きい声を聞いて、部屋の人々はみんな童彦を見た。

「キヤカリンが離婚したいと言ったの。源之丞おじさんの足はよくならないそうなの。歩く

ことができないそうなの。だから、キヤカリンは『源之丞おじさんが好き。でも、源之丞

おじさんといっしょに生活できない、離婚したい』と言ったの。キヤカリンは『私はまだ2

6歳で、まだまだ若い。これからしたいことがたくさんあるから、歩けない人の世話ができ

ない。だから離婚したい』と言ったの。」

「それで、源之丞さんは出ていったのか？」

「そう。源之丞おじさんは『キヤカリンの気持ちはよくわかる、ぼくは大丈夫だから好き

なようにしてほい。』と言ったの。そして、その夜、一人で車椅子で出かけたの。』

「ギヤサリは『私が悪かった』と言って泣いていたの。『源之丞は帰ってこないかもしれない。私が離婚したいと言ったから、帰ってこないにちがいない。』と言っていた。私はギヤサリの家に、源之丞おじさんのいない家にいることができた

いから、日本に帰ってきたの。でもおじいちゃんのところへ行けない。おじいちゃんは何もわからなくなってしまうた。私、行くところがないの。おじさん、迎えに来て……。」

「わかった。行くよ。行くから、ゆう子、心配しないで北海道へ来い。」

「うん、おじさん、ありがと?」

電話をきいて、竜彦はまわりの人に言った。「ほくの子供が帰ってきた。アメリカから帰ってきた。今から、空港へ迎えに行きます。」

三日も寝ていないのに、空港まで車で行って大丈夫? 運転できる?』と、おばの女の人が言った。

「大丈夫、大丈夫。じゃ、みなさん、さようなら。」

「運転に気をつけて。」と、女の人が言った。

部屋を出た竜彦はポケットから携帯電話を出し、ボタンを押した。

「もしもし、ゆかりさん。野崎です。今日のホテルの予約はできています?」

「ええ、この前行ったホテル。レストランは6時半から。」

「悪いけど、三人で食事したいんだ。ゆう子がアメリカから帰ってきた。」

「あら、そう。クリスマスのお休み? ホテルは大丈夫だと思っわ。ホテルに電話をして、食事は二人じゃなくて三人だと言っわ。」

なようにしてほい。』と言ったの。そして、その夜、一人で車椅子で出かけたの。』

「ギヤサリは『私が悪かった』と言って泣いていたの。『源之丞は帰ってこないかもしれない。私が離婚したいと言ったから、帰ってこないにちがいない。』と言っていた。私はギヤサリの家に、源之丞おじさんのいない家にいることができた

いから、日本に帰ってきたの。でもおじいちゃんのところへ行けない。おじいちゃんは何もわからなくなってしまうた。私、行くところがないの。おじさん、迎えに来て……。」

「わかった。行くよ。行くから、ゆう子、心配しないで北海道へ来い。」

「うん、おじさん、ありがと?」

電話をきいて、竜彦はまわりの人に言った。「ほくの子供が帰ってきた。アメリカから帰ってきた。今から、空港へ迎えに行きます。」

三日も寝ていないのに、空港まで車で行って大丈夫? 運転できる?』と、おばの女の人が言った。

「大丈夫、大丈夫。じゃ、みなさん、さようなら。」

「運転に気をつけて。」と、女の人が言った。

部屋を出た竜彦はポケットから携帯電話を出し、ボタンを押した。

「もしもし、ゆかりさん。野崎です。今日のホテルの予約はできています?」

「ええ、この前行ったホテル。レストランは6時半から。」

「悪いけど、三人で食事したいんだ。ゆう子がアメリカから帰ってきた。」

「あら、そう。クリスマスのお休み? ホテルは大丈夫だと思っわ。ホテルに電話をして、食事は二人じゃなくて三人だと言っわ。」

「ありがとうございます。ホテルの部屋も予約した？」

「ええ」

「申し訳ないけど、今晚はゆう子と二人で泊まってくれない？ほくはアパートに帰る」

「いいわ。ゆう子ちゃんとかと友達になりたいし、いい機会よ」

「いい機会？ありがとう。じゃ、ほくはこれから空港へゆう子を迎えに行く。飛行機は16時

35分に着くから、6時半にホテルへ行けると思う」

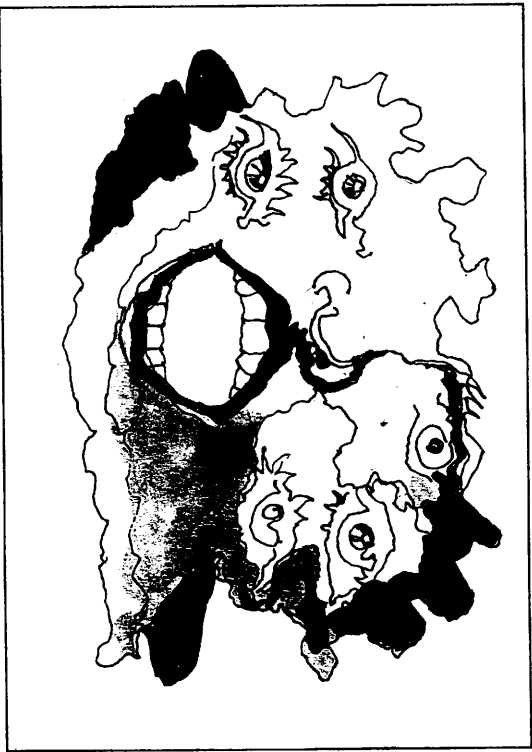
「雪が降っているわ。道が滑るから危ないわ。運転に気をつけてね」

(12)

ゆう子はこれからどうなるのだろう？

竜彦はゆかりと普通の幸せな結婚ができるだろうか？

それとも・・・？



(どうしてゆう子は幸せな生活ができないのだろうか。次から次に困った上が抱える。

お母さんの千絵が死んだ。おはあさんの登美子

が死んだ。千絵の弟の源之丞がいなくなつ

た・・・。ゆう子の大切な人が次から次に

いなくなる。どうしてだろう？ゆう子の大切に

な人、ゆう子の好きな人。うん、そろだゆう

子の大切な人はみんないなくなる・・・、み

んな死ぬ？ゆう子に好かれたら、死ぬ？じゃ

ゆう子は魔女？ 魔女のような女の子？魔女

に好かれた人は死ぬ・・・。ゆう子に好かれた人

は・・・。じゃ、ほくも？)

竜彦は頭を振って、目を大きく開けて前を見た。車の外は真っ白だ。

空港には人がたくさんいる。「おじさん、たくさんの人の中から、ゆづ子が走ってきた。そ

して、竜彦の胸に飛びこんで、大きい声で泣き始めた。

「ゆづ子、お帰り。もう大丈夫だ。」竜彦はゆづ子を強く抱いた。

雪が降り続けている。真っ白な雪が次から次に降ってきて、前がよく見えない。

車を運転する竜彦の隣にゆづ子が座っている。

「おじさん、おなかすいたよ。」

「そうか？今日はホテルのレストランでおいしいものを食べよう。会社の人といっしょだけだし、いい？」

「その人、女の人？」

「そうだ。今晚は、おいしいものを食べた後、その人といっしょにホテルに泊まるよ。」

「おじさんは？」

「ぼくはアパートへ帰る。明日はぼくのお母さんのもとへ行く。」

「おじさんのお母さん？ あ、北海道の病院に来てくれたおばさん？」

「そうだ。ぼくのお母さんだ。ぼくのお母さんの家でいっしょにお正月をしよう。」

「会社の女の人もいっしょに行くの？」

「行きたいと言ったら、いっしょに行く。」

「おじさん、その人と結婚する？」

「もしゆづ子がお母さんだったら、結婚する。」

「私がお母さんだったら？」

「ゆづ子が好きじゃなかったら、しないよ。」

「おじさん、おじさんが結婚しても、私はおじさんといっしょにいてもいい。」
「いよ、ゆう子。ぼくの子供になれ。もう、どこへ行くな。」と言つて、竜彦はやさしくゆう子
の顔を見た。

「ん。」とゆう子は竜彦の顔を見て、うれしそうに笑つた。竜彦はゆう子の顔を見ながら、左
の手でゆう子の手を取つた。ゆう子はその手を両方の手で強く握つた。

その時、車が滑つた。

「おじさん、こわい！ 前を見て運転して！」

車は滑り続け、竜彦は、両方の手で運転しようとするが、ゆう子が竜彦の左手を強
く握つている。ゆう子は、こわくて竜彦の左手をもつともつと強く握る。

車は、滑っている。竜彦は車を止めようとするが、止まらない。車は、止まらないで右

へ行つたり、左へ行つたりしながら滑り続ける。

「魔女……。ゆう子の大切な人は死ぬ……。ゆう子の好きな人は死ぬ……。」

ゆう子は魔女か？ ぼくは死ぬのか？ 魔女、魔女、魔女、魔女、魔女、魔女、魔女、魔女、魔女、魔女、
ぼが走つた。車は止まらない。右へ、左へ滑り続ける。真っ白な道の向こうから大きい

車が走つてきた。

「おじさん、こわい！」ゆう子が大きい声で言った。

「あー！」竜彦は大きく目を開けた。(ゆう子。ゆう子が魔女……。魔女……。ゆう子は魔女じ
やない！ゆう子はぼくの子供だ！ぼくは、ゆう子に責任がある。ぼくはゆう子に責任を持たなけ

ればならない。ぼくは……。車を止めなければならぬ！) 竜彦は強く思つた。

「大丈夫だ、ゆう子。ぼくたちは死なない！」

終

この日本語版グレイデイト・リーダーは JGR
プロジェクトグループが開発した試作品です。
販売を目的としたものではありません。この日
本語版グレイデイト・リーダー、及び、JGR
プロジェクトグループに関するお問い合わせは、
igrrpj@hotmail.com へお願いいたします。

© 2003 by JGR プロジェクトグループ